

民俗民芸双書 4

文学と民俗学

池田弥三郎 著

民俗
民芸
双書 4

文学と民俗学

一九六九年九月三十日参版発行

定価 九八〇円

著者 ◎池田弥三郎

発行者 岩崎 治子

印刷 光明社

製本 光明社

発行所 岩崎美術社

東京都千代田区神田神保町一ノ六五

電話(五七)三一二一―四

振替東京九〇六四九

は し が き

文学史というものが、もし、文学作品の時間的排列の叙述にすぎないものに許される名であるとするならば、われわれは今日までに、すでに多くの「日本文学史」を所有していることになる。だがそれと同時に、そういう態度の文学史が、はたして厳密な意味で、日本文学の「歴史」といいうるだろうかという疑問も、すでに多くの人びとによって、表明せられて来た。

今日では、もっとも素朴な態度の文学史の読者といえど、もはや、中央政權の変転起伏を主筋とした政治史の時代区分によりかかって、文学の歴史の時代区分をたてることには満足しないであろうし、また、功を急ぐのあまりに、西欧の文学史の業績の上について、その方法と叙述との直輸入によって作り上げられた、明治年代以来の国文学史にも、多くの不満をおぼえずにはいられないであろう。

は し が き
ことに日本文学の場合、今日われわれの手に残された文学作品は、じつはぐうぜんの幸福によって消滅をまぬかれた、ごくわずかな「一部分」にしかすぎないものである。したがってそれらの作品の時間的排列の叙述は、いわばとび石づたいであって、少なくともわれわれの考え

ている「歴史」を形成するとは思われない。それらの対象は、いわば海面に頭を出した氷山の一角であって、文学の「歴史」とは、じつは海面下に没していて、しかも海面上の一角をささえている部分をも、その考察の対象とするのでなければ、まったく叙述はえられないのである。

つまり文学を頂点として、それに続く文学以前の文学、さらにその下にある民俗慣習、さらにその土台にある生活そのものまでをふくめて、われわれの考察の対象とするのでなければ、われわれの満足しうる文学史——少なくとも「歴史」と名告りうる叙述を、はたすことはできないであろう。日本文学の作品の時間的排列の叙述が、歴史と名告るにふさわしいものとなるためには、かろうじて残存した作品、もしくは、ぐうぜん書物の形となったがために伝来せられた作品の、とび石づたいではなく、文学の花を咲かせるに到った文学母胎の考察に、一層の力をこめなければならないはずである。日本文学の作品は断続しているが、その文学母胎は、ひと続きの底流をなしているからである。そして、文学の母胎としての、文学以前の文学、および民俗慣習までを考察の対象として後に、はじめて日本文学の歴史の叙述の可能性が生ずるのである。

本書に集めた諸論考は、そうした日本文学史の叙述の前提として、日本文学と日本民俗との出入りを考察したものである。もとより、はじめから一貫した目的のもとに書かれたものでは

ないために、考察の角度と叙述の態度とには統一がないが、しかも、どれも、その問題の解明に向っている。それであえて、「文学と民俗学」とをもって書名としたのである。もちろん、本書の諸論考が、その期待に十分こたえうとは思っていないのであるが、われわれの意図する日本文学史の叙述は、民俗学的方法によってのみ、もっとも有力にはたされうと、確信するからである。

文学の母胎への豊かな考察をとまなわなかった従来の文学史に対する私の不満は、作品の成立についての考え方の不自由さに出発している。そしてそれにひき続いては、作者と作品との関係について、ひどくきゅうくつな考え方をしていることをあげなければならない。

たとえば、戦後の源氏物語の研究は、ようやく、この長編物語が、巻の順序にしたがって書かれて行ったものではなかったということの証明に向って来た。戦後の国文学界は、その有力な業績のいくつかを持ちえたのであるが、なおかつそれらの研究は、作者としては、ただ紫式部を考えているだけで、その点に、根本的な疑いをもってはいないようである。多数の作者の参加ということを考えるほどには、自由になっていないのである。この点に関しては、同門の先輩である山本健吉氏が、非常にいい発言をされた（古典と現代文学）のであるが、本書においては、「源氏物語の流行」の中で、側面から説いたにすぎず、源氏物語の成長については、

後日を期することになってしまった。しかし、宇津保物語については、ほぼその問題を明らかにしえたと自負している（宇津保物語の成長）。

われわれの手に残されている作品は、今日の小説のように、ある時をもって明確に固定した作品として扱うことは許されない。変化し流動し成長している最中に、あたかも早取り写真が撮影したひとこまのごとき、一瞬の停止の姿を見せているにすぎないものが多いのである。宇津保物語がそうであるごとく、源氏物語もそうである。ただ源氏が比較的早くその成長をやめたのに、宇津保はその後までも変化と流動とを続けたのである。短編説話集であるから多少その傾向は違うけれども、伊勢物語にしても大和物語にしても、同じ変化と流動とを考えなければならぬ。勅撰和歌集の第一である古今和歌集のごときものでも、十分その疑いをもってかからねばならないはずであり、万葉集にしても、まず、万葉集の名をもって呼ばれたのは、巻八・巻十の二巻であつたに相違ない。これらの問題は、「万葉二巻説」「古今集成立論」「説話文学論」として、本書以後にこころみるつもりである。

作者と作品との関係については、たとえば最近新しい疑問が、井原西鶴に関して発表された。森銑三氏がその著「西鶴と西鶴本」において説かれた、「好色一代男」以外は西鶴作とは認めがたい、という説である。この説をめぐる、しばらくにぎやかな論戦があつたが、反対者が

多く、支持者の積極的なものはなかったようであった。事実森氏の説明は、この新説の提唱にはやや不向きな方法であったと思われる。論理の展開、証明の技術が、ともに適當でなかった。しかも私には、事實は森氏のいうがごとくではなかったかという思いがしきりにするのである。日本文学における作者と作品との関係を背景にして考える時、日本文学の事実としては、西鶴という名の作者は、井原西鶴という個人と、その周囲の数名の俳諧師、隠者達をふくめての名であったということは、いかにもありそうなことである。柿本人麻呂や小野小町の昔にさかのぼるまでもなく、その人びとに比べては、ぐっとわれわれの時代に近く、しかも宗教的ベールをはぎとっている時代の人である西鶴などにしても、日本文学の作者の名というものは、なおかつ集団の名であって、作品が共同制作せられるものであるということとは、可能な事実として考えるだけの用意はしてかからなければならないのである。こう言う見方に立って、森氏によって提供せられた個々の資料を組織しなおしたならば、森氏の説は、もっと確實さを増して来て、人びとをうなづかせるに違いない。西鶴と同じ時代に、戯曲の方は、どしどし合作が行われていた。しかしこの方は明らかに数名の署名がある。だから合作だと認めるが、西鶴作の浮世草子には、西鶴以外の確たる署名がないではないかというのでは、日本文学の作品を考えるのには、少し正直すぎるのである。

だが、従来の文学史が、変化し流動する諸相を説いてばかりいて、一方に変化しない面があることを説かなすぎたことにも、私の不満がある。変化を眺める文学史と平行して、「変らざる文学史」ということも考えないわけにはいかない。折口先生は日本文学のテーマの一つとして、「貴種流離譚」を考えられた。文学など、けぶりもなかった昔から、歴史の時代を縦に貫いて、今日にいたるまで、くり返しくり返し語られ書かれ続けた「貴種流離譚」の展望は、いわば、変らざる文学史である。日本人の悲しみの対象、興味の対象は、まことに変らざる数千年をわれわれに示している。このことについては、すでに前著「芸能」の歌舞妓の台本を扱った中にもふれてあるが、本書の「雨の詩恋の歌」は、いかに日本人の文学的興味、文学に求めるものが変らないかを、正面から扱ってみたものである。これは、はじめ「新文明」の創刊号にやや読みもの風に書いたものであったが、それを書き改めて「雨の民俗文学」として論文にしたて、角川書店の「短歌」に送ったが、編集者の交替のあおりで陽の目を見ず、とり返した原稿を「芸能復興」に送った所、とうとうその編集室で失われてしまった。今度本書におさめるに当って、ふたたび書きなおしたが、表現のゆるさが気になる文章である。

変らざる文学史の考えは、宇津保論の中にも、まますいじめの文学の中にも、濃厚に現われているはずであるが、それを折口先生のように「日本文学のテーマ」と呼ぶべきか、日本文学

の素材と呼ぶべきか、現在のところ、私自身結着していない。じつをいうと、日本文学の研究にあたって、今までの国文学者の怠慢は、日本文学研究の広い場所に共通する、術語の固定、少なくとも概念の規正をはからなかったことにある。時代区分を示す「上代」「上世」「中世」「近古」「近世」などという語の使用の不統一と放漫さを見るだけでも、呆然とする。「昔話」という語が、柳田先生の論文によって術語化されても、その語の卑近さを学問の冒瀆とでも思うのか、使用しながらない。そして今日では、民俗学者までが「民話」という語を好んで使い、折角学術語としての規定をえていた「昔話」を、ふたたびあいまいな語にしまった。また折口先生が芸能史を組織して「芸能」という語を術語化すと、文部省が「芸能科」を設置してたちまちにその使用例をめっちゃめっちゃにしてしまう。一方、広く世界文学に共通する術語を取り入れて使用しようとする、外国文学にいたり深く、自国の文学に対してはややいたり浅い専門家や批評家は、よってたかつてその用語例の不適切さを難詰する。もちろん、外国文学の用語を日本文学の研究にあたって借用することには、われわれは十分に慎重でなければならぬが、こうした事態が、今日の日本文学の研究を、どのくらい不幸にしているかわからない。本書の大半をしめる「まますいじめの文学」は、「継子いじめ譚とその周囲」として、雑誌「新文明」に連載したものである。雑誌の読者を予想して、なるべく「話」や「事実」そのもの

うべき源氏が、よろこばれるわけはなかった。今日の、一夫一婦制の世の中から、まったく異なる習俗の世の中であつた源氏の世界を、同情も理解もなく、淫靡頹廢とかたづけ、一流の学者でさえ、源氏研究の自著の序文に、源氏はわが道義心よりして是認しがたしと書き記した時代だつた。折口信夫先生が、当時、大学の教室で「源氏をエロチックだといつて騒ぎだてるくらいなら、警察は、犬が街頭でつがっているのを放っておくことはない。その方がよっぽど、良風美俗に反するではないか」といわれたのは有名な話である。

ところが、この二つの理由は、二つながらにして消え去つた。天皇は、御自身で人間宣言をなさり、台所のお釜の中をのぞかれたりするまでになつてしまつた。われわれの学生時代、手から手へと筆写された「川柳末摘花」は、どうどうと店頭に飾られるし、良風美俗の方も、すっかり幅の広いものとなつた。もはや源氏の程度のエロチシズムは、なんの刺激も感じないほどに、世間にもつとあくどいものが氾濫してしまつた。源氏に眉をひそめた世間も、風俗壞乱はおろか、宮廷の神聖を犯すという切り札さえ、通用しなくなつてしまつたのだから、まさに源氏にとっては、一陽来復というわけであつた。

しかし、源氏の春が立ち帰るのには、もう一つ大事なことがあつた。

敗戦は、今までの権威あるものを、すっかり流し去つたばかりではない、価値転倒の時代が

だ。そのために、これも文章の苦勞が足りないが、かえって読みやすいとも思う。日本文学史に欠けている作品鑑賞について、わずかながらも加える所があると思っている。

「宇津保物語の成長」は、かなり大部な私の宇津保研究の一部である。まだ学生であった時に、雑誌にのせた私の宇津保論が、折口先生の目に触れて、「新編宇津保物語」の形を考えてみるようにと先生からとくにいわれた。「新編」というのは、早くから先生が源氏物語について考えておられたもので、源氏物語は余りに長すぎるから、横の並びの巻とか、後入の部分とかを削り去って、全体の三分の一ぐらいにしてしまおうというのであった。改造文庫が昭和初年に刊行された時、すでにその各冊のおわりの近刊予告に「新編源氏物語」の名が出ていたので、これは先生としてはごく早くからの計画であったことがわかる。その仕事を、宇津保物語でこころみよという課題であったが、その新編の編集のより所とするために、宇津保の構成を考え、成立を考えている中に、「琴きんの族ぞうの物語」といったものを考えるようになった。それらの論文を書物にまとめるようにと、先生からすすめられている中に、私の興味が少しずつ移っていった、「物語の成長——宇津保物語の場合」という形にまとめたのである。源氏の場合、伊勢・大和の場合をそれぞれまとめてから本にしますなどといっている中に、先生にお別れしてしまった。それらの論文も、今後の私に課せられた、先生との約束ごとである。けっき

よくこの宇津保論が、生前の先生にみていただいた、私の唯一の、国文学の論文らしい論文である。

「文学と民俗学」は、岩波書店の「文学」の特集「日本における文学史研究」の中の一編としての課題にこたえて書いた「折口先生の学問」という論文である。与えられた時日の余裕が乏しく、ことにメ切り間ぎわの一週間は、学生をつれての研究旅行にぶつかっていたので、十分なものとはいえない。しかしその研究旅行は、先生が三田の学生のために何回か戦前に行われた「万葉旅行」であって、先生の歿後、私が学生をつれて行くことになった、その大和の旅行中に、先生と歩いた日々を思い出しながら、奈良や吉野の旅宿で書きついだものである。その思慕の情が、あるいはこれを、多少とも見るべきものとしているかもしれない。改作の余裕のないままに、巻末に附載する形をとったが、それがおのずから、本書の諸論考の方法論の反省ともなり、将来への道を、自分自身に示す形になったのは、望外の仕合せであった。先生の学問については、三田の国文科以来の友人、加藤守雄、戸板康二の両君と三人でころもみた座談会「折口先生と芸能史」が「国学院雑誌」第五十六巻第四号、芸能史特集号にのっている。本稿は、この座談会での両君の啓発にまつものが多いので、もしあわせて読んでいただければありがたいと思う。

本書と前著「芸能」とは、折口先生に手をひかれつつ、国文学民俗学の研究をおこなった時代の、私の貧しい記念碑であるといえようと思う。慶応義塾は、この二著に示した「日本芸能および国文学に関する民俗学的研究」に対して、昭和三十年度の「義塾賞」を授与せられた。まことにありがたいことであった。私は、先輩知友の恩情に囲まれながら、研究生活を続けていける私自身の幸福を、今、ひしひしと感じているのである。

昭和三十一年三月

著者

はしがき

目次

源氏物語の流行・・・・・・・・・・・・・・一

源氏の流行・・・・・・・・・・・・・・源氏の春 三

流行の原因・・・・・・・・・・・・・・脚色源氏 二〇

源氏の世界・・・・・・・・・・・・・・光源氏の敵 二七

密通事件・・・・・・・・・・・・・・もののけ 三〇

財産・・・・・・・・・・・・・・露出する顔 三三

まま子いじめの文学とその周囲・・・・・・・・・・・・・・四

生活・民俗・文学・・・・・・・・・・・・・・文学の効用 四

男のまま子・・・・・・・・・・・・・・もう一人の男のまま子 五

まま母の恋・・・・・・・・・・・・・・まま子としての光源氏 六

神仏の靈驗 三

美女と河童 九

しのびの段 九

完全なる結婚 一〇

日本式教育 二四

人生における資格審査 二三

いじめられた人びと 三三

幸福な虐待 一七

さすらいの姫君 二四

まま子の変装 一六

まま母いじめ 二五

本子の登場 一六

さまざまな母 一七

まま母の成立 一八

雨の詩・恋の歌・・・・・・・・・・ 一九

歌謡曲の文学以前 一八

芸謡の恋愛詩 一五

雨の民俗文学 二〇

ながめの文学 二四

変らざる文学史 二三

宇津保物語の成長・・・・・・・・ 二五

偽作説の検討	三五	先行する中編小説その一	二三
先行する中編小説その二	二四〇	先行する中編小説その三	二五〇
宇津保物語の改作その一	二五八	宇津保物語の改作その二	二六五
余論	二七〇		
文学と民俗学	二七四		
学 の 師 承	二七五	国文学と民俗学と	二八〇
新しき文学史	二八三	芸能史の成立	二九〇
